

勝林寺々報

仏光測量なきゆえに
難思光仏と名づけたり
諸仏は往生嘆じつつ
弥陀の功德を称せしむ

しか思つたり考えたりできないでいるのが私たちです。犬はまつたくの色盲だそうです。蛙の目は、とび出ていますが、動くものしかギヤツチできない目だそうです。人間の目は一秒間に五十回と百回微妙に震動しているので、ものが立体的に見えるのだそうです。このように動物それぞれに特徴ある目をもち、それぞれの目で見るそれぞれの世界を生きております。そして自分の目から人を見て、笑つたり、さげすんだりバカにしたりしています。

その自分の目をあまり疑つてみることをしないのです。

阿弥陀如来さまのお徳を、いろいろとよび名をかえてたたえる歌をうたわれます。これは第十番目のうたです。「難思光仏」

それから次の十一番目は、「無称光仏」です。

もちろんこの如来さまのよび名のかずかずは、すでに『大無量寿經』にも、またこのうたのお手本である彌勒さまの『讚阿弥陀仏偈』にあります。ですが、おそらく親鸞さまは、自分の気持ちで自分のうたをここまで次々と詠んでこれらに違ひないと思います。そしてここまでいろいろと、ことばをつくし思いをこらしてうたつてきたのだけれど、ここでハタと筆がうごかなくなつてしまつたのだと思います。

どんなに思いをこらそうと、どんなにことばでたたえようと、思いもおよばぬ言葉でも尽せない「真実のおおきさ」に胸うたれたのだと思ひます。

「真実のおおきさ」の前に、人間の思考・ことばの小ささとむなしさを、今さらながら思ひ知らされたのだと思ひます。

考えてみれば確かに、私たちの感覚や思考はど実はあやふやなものはないのです。そのあやふやな感覚で感じたり、小さな考えい込んでくるしているところに人生のまよいや苦しみのもとがあるよう思います。実はあやふやである私一人の感覚や考えの小さな殻にとじこもり、その小世界のなかだけで

はということです。
こんなとてつもない願いはありません。

悪人をこそ往生せしめなければ、というそいう願がこの私にかけられていたことが知らされるのは、この往生を、ほめ嘆えられる沢山のはとけ様がたの声「南無阿弥陀仏」（阿弥陀如來をたのみましよう）的一大讃歌がきこえていました。

私たちの小さなはからい（測量）など、なんの役にも立たないことが知らされるのは、阿弥陀如來さまの功德（おはたらき）が南無阿弥陀（必ず救う）ときこえてきたからです。

親鸞さまはいま、小さかしい思いをすてて、思ふことも言つてみることもできない（難思・無称）大きな広い如来のお慈悲を、ナモアミダブツのお念仏のなかでいただいておられるのです。

そういう一人よりの見方から、障害者を知恵をくれだとかといつて差別したり、黒人や少数民族を、ただ字が読めないということだけで劣等視したりするのです。

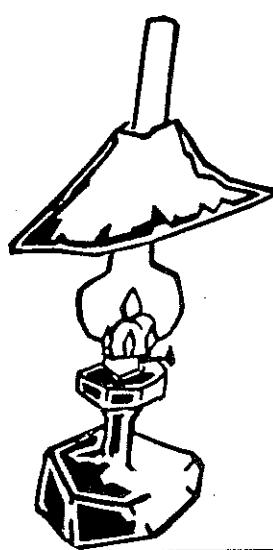
そういう自分の目だけでもののねうちまで測量（はかる）している私の、そのあさはかさに気づかせられる一瞬があります。

それは、私たちの住んでいる小世界。我執と対立と争いの世界を越えた、広い大きな世界の光に照らされ、広い大きな世界からの声によびさまでられたときです。

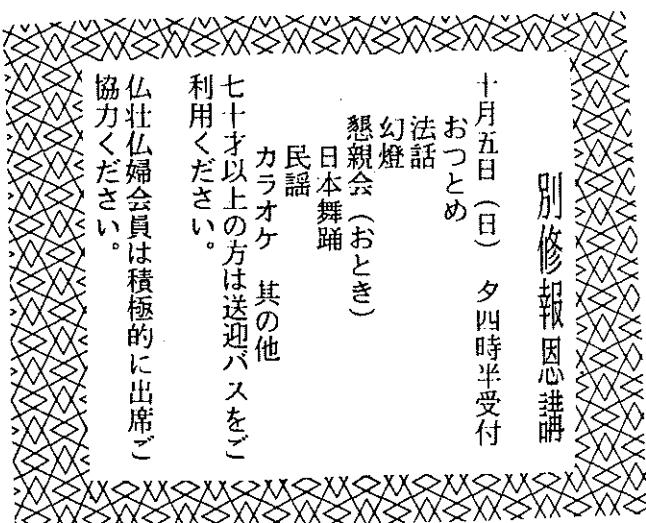
たゞよく聞き、心中の通りを同行に会い談合すべきなり。

ちよつとご法話を聽聞したといつても人といふものは、自分に都合のいいように聞きとつてしまふのです。だから大事なことは、たゞすなおに聞いて、そして聞いたことを自分一人のなかで余るるのでなく、共に道を歩む朋友に、聞いたお詫解（りょうげ）を話して寄合（よりあい）談合（はなし合い）することがなければなりません。

一蓮如上人御一代開示



十月の二よみ



別修報因心講

法話

幻燈
懇親会（おとぎ）
日本舞踊

民謡
カラオケ
其の他

佛社仏婦会員は積極的に出席
協力ください。

生キトシ生ケル者をつむということは、具体的には、最も救いがたい罪業深重の私を救わなければ

二日	島根県大藏寺永代経法話
三日	同。「玉田会」報恩講
五日	勝林寺別修報恩講
六日	連研資料作成委員会（本山）
七日	同。世界仏教婦人大会（京都国際会館）
八日	世界仏教婦人大会（出石組連研講（勝林寺））
九日	同。前田職群月命日
十日	山田昭二氏法事
十一日	衣川正之氏法事
十二日	紅葉苑
十三日	兵庫教区教化推進協議会（神戸）
十四日	鹿児島教区連研研究会
十五日	大建始光寺報恩講法話（+二十三日）
十六日	同
十七日	同
十八日	基幹運動本部専門委員会（本山）
二十日	二十一日 善立寺報恩講（+二十五日）
二十一日	二十四日（+二十六日）長尊寺報恩講
二十二日	二十六日 湯口昇司宅法事
二十三日	二十七日 正法寺報恩講
二十四日	三十日 滋賀山東組ご巡教隨行
二十五日	三十一日 「はちす会」講話（姫路）
二十六日	三十二日 「はちす会」講話（姫路）
二十七日	三十三日 正法寺報恩講
二十八日	三十四日 同
二十九日	三十五日 同
三十日	三十六日 同
三十一日	三十七日 同

老いの煙にまきこまれて、煙にむせび老いの煙にしひれて、それで終つてしまふのでしようか。

死におひえ、あわてふためいて、老いゆき死んでしまうのでしょうか。

ホテル火災がつづきます。

何人も何十人も、一度に亡くなりました。

お年寄りも小さな子供も亡くなつたということです。から、ほんとに痛ましいことです。

「非常口」の確認ができていたので、それで逃げ場を失つて、みんな折り重なつて亡くなつて、と言います。

それが「非常口」です。

その「非常口」を、ほんとはそのホテルに入つたときには確かめておくべきです。「非常口」の確認です。

それはその通りなのです。

でもだれも、そんなまさかのことが起きるとは、だれも思わないのです。

起きると思わず起つてしまふのです。

旅だからその時々には、ごく泊まらなければなりません。はたごく泊まらなければなりません。かわらないのです。

そのときに、あなた、「非常口」をちゃんと確認していますか。

この森での菩薩シツタルタは、仙人たちと同様に、草ぶきの粗末な小屋で雨露をしのがれました。近くの村々に赴いて食を乞うては飢えをしのぎ、

苦行の日々

巨木の下、河のほとりで静かに想念をこらされました。

時にはまた彼方の岩山に登り、そのほら穴でも修行を続けられました。

どろの中、いばらのなかに起きふしなさつたことも多くあつたといいます。

しかし、最も厳しかつたのは、呼吸を鎮める道を、お念佛のなかに聞きとつてくださつたのが親鸞さまです。

「生死出ずべき道」、生死の「非常口」を求められたのが親鸞さまです。

「生死出ずべき道」…みごと生死を超えて生きることです。

「非常口」の確認ができていたので、それで逃げ場を失つて、みんな折り重なつて亡くなつて、と言います。

「非常口」…普段あつてはならぬことですがおこつたとき、脱出する逃げ口がどのホテルでも旅館でも作つてあるはずです。

その「非常口」を、ほんとはそのホテルに入つたときには確かめておくべきです。「非常口」の確認です。

それはその通りなのです。

でもだれも、そんなまさかのことが起きるとは、だれも思わないのです。

起きると思わず起つてしまふのです。

旅だからその時々には、ごく泊まらなければなりません。はたごく泊まらなければなりません。かわらないのです。

そのときに、あなた、「非常口」をちゃんと確認していますか。

老いという火煙が、あなたの身をとりまいたとき、あなた、その老いの「非常口」を見つけているでしょうか。

死が突然襲つてきたときに、あなた、あわてず死と対決できる「非常口」を見定めてありますか。



お釈迦さま
の
ご生涯

苦行の森へ

一五〇〇年前の
昔、マカダムのあたりは、おまじないに明け暮れる祈

とう師や、心の問題を考えない唯物論者、すべて運命

をしない人々、道徳を否定する学者など、いろいろな思想家（六師外道）がたくさんいました。

ビンバシヤラ王の申し出をことわつて、ひたすら真理の道を進まれる菩薩シツタルタが、まず師として選ばれたのはアーラーラ・カーラーマ、次がウツダカ・ラーマブツダだつたと伝えられています。その他にも教えを受けたり議論をたたかわした哲学者や宗教者の数は、少なくなかつたでしょ。

しかしほんなく、それらの師のすべてを追い越してしまわれた菩薩シツタルタは、やがて王舎城の西南方、ガーヤ市からさらに南に下つた、樹木と河の流れの美くしいウルベーラー市の近くの森で、仙人の仲間に入つて修行をお続けになりました。

六年間の激しい修行に、さすがの菩薩シツタルタも、身も心も疲れはててしましました。

ニレンゼン河で水浴中、危うくおぼれるところ、河面にさし出た樹の枝にすがつてやつといのちびりされましたが、

菩薩はお考えになりました。

「からだを苦しめるだけでは悟りの境地には達することはできない。真理は、こころのすばらしい働きによつてのみ発見できる」

菩薩は心の輝きを求めて、巨木の根もとに端座しておられました。

ちようどその時、村長の娘スジヤータがその前を通りかかりました。

修行をなさる菩薩の、おこそかな姿を見て、

「これはヤクシャ（樹の神）に違ひない」と思つたスジヤータは、菩薩に牛乳で炊いたおかゆをお供えしました。

そのおかげで、菩薩の全身には力がみなぎり、

こころの輝きも次第に増してきました。

もはや、悟りの日は遠くありません。

（豊原大成先生「釋尊の生涯」）

背中をのばし
前をむいて
しゃんと歩くこと。
それから
人間だけが
でけること。

米一升、
塩大さじ一杯
(材料)

ギンナンごはん

(炊き方)

①取れたての「ぎんなん」の鬼皮をとる。

②沸騰した湯に少量の塩を入れた中に「ぎんなん」を入れサツと湯がき、甘皮をむく。

③米をあらつて普通の水加減にして炊く。

④「ぎんなん」を煮込んだ湯を用意する。

そのおかげで、菩薩の全身には力がみなぎり、

こころの輝きも次第に増してきました。

もはや、悟りの日は遠くありません。

（豊原大成先生「釋尊の生涯」）

そのおかげで、菩薩の全身には力がみなぎり、

こころの輝きも次第に増してきました。

もはや、悟りの日は遠くありません。

（豊原大成先生「釋